

【氏名】 樺沢 麻美

【所属大学院】 (助成決定時)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ地域専攻

【研究題目】

シエラレオネにおけるチンパンジーと人の関わり：チンパンジー観と保全

【研究の目的】

チンパンジー生息地の人々にとって「チンパンジー」がどのような存在であるかを、文化的および社会的見地と、近年先進国によって導入された「保護されるべき対象」といった観点から調査することである。本研究では70年代まで先進国における医療研究や娯楽・ペット市場への生きたチンパンジーの主たる供給国であったシエラレオネを調査地とする。同国内では違法チンパンジーペット取引が問題となっており、それに対処するため、没収されたチンパンジーを収容・飼育する「サンクチュアリ」という施設を中心にチンパンジー保全活動を行っている。絶滅危惧種であるチンパンジーの生息地アフリカにおける保全活動は、主に先進国の援助と技術協力の下にすすめられているが、その活動を維持していくために、現地の人々の理解と参加、そして主体性が望まれている。過去30年に急増し、さまざまな方法で進められているチンパンジー保全活動が現地の人々にどのように受け止められているか、あるいは人々のチンパンジー観とその「保全」がどのような関係にあるかを研究する。

【研究の内容・方法】

シエラレオネ現地において以下の調査を2006年10月6日より2007年3月15日の間で行った。

1. チンパンジーに関する文献資料の収集、および現地野生動物保全関係者からの聞き込み調査。首都フリータウンで、現地大学、関係政府機関、環境保全NGOなどを訪問し、チンパンジーおよびその保護に関する文献資料収集した。現地政府野生動物保全関係機関の職員、環境保全NGO職員を対象に聞き込み調査を行い、法を執行する立場から見た保全の状況、および70年代のチンパンジー輸出に関する情報の収集をした。

3. 50年代から70年代にかけて行われたチンパンジーの捕獲と輸出に関する調査。当時チンパンジーの捕獲、輸出に関わった動物商、獣医、猟師から聞き込み調査を行った。

4. チンパンジー・サンクチュアリにおける調査。フリータウン近郊のタクガマ・チンパンジー・サンクチュアリで、同施設での種の保全に向けての活動、同施設の飼育下にあるチンパンジーの没収までの経緯(持ち主、取引に関する情報等)に関する調査をした。サンクチュアリに実際に滞在し参与観察を行い、実際に同施設で保全活動に関わる現地関

係者、国内外からの訪問客、サンクチュアリ周辺の住民から「チンパンジー」という動物に対する考えやその保全をどのように受け止めているか聞き込み調査を行った。

5. チンパンジー生息地に住む人々に関する調査

現在シエラレオネで野生チンパンジーは北部と東部の地域にまだ生息していると予測されている。今回の調査では、ボ、マケニ、ケネマ周辺の村を中心に「チンパンジー観」について聞き込みを元にした調査をおこなった。

帰国後はデータの整理、新たな文献、資料の収集、電子メールなどで関係者からさらに情報の収集を行った。、現在学術書に投稿するための論文を執筆中である。

【結論・考察】

現地の調査と文献資料から、シエラレオネにおけるチンパンジー観は多様で、民族、世代、宗教に影響されていることがわかった。そのことから、チンパンジー保全に対する考えもさまざまであった。没収されたチンパンジーを保護する「サンクチュアリ」に対してはその目的について理解は低かったが、賛同を示す傾向が多かった。さらに、過去に先進国での需要によって行われた捕獲と輸出が、現在でも、現地の人々の「先進国の人々はチンパンジーを買う」という認識として、チンパンジーペット取引に大きな影響を与えていることが推測された。チンパンジーの絶滅の危機の要因として、主に森林の縮小、ブッシュミートを得るための過度の狩猟が一般的にあげられているが、シエラレオネにおいてはペット問題も深刻であり、以上のことを理解することが今後の同国における保全の取り組みにおいて重要だと思われた。